

三月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

「この」「あの」「その」 水島晴子 兵庫

舞ひ上がるすなはち機体かたむけてかがやく冬の雲に入りゆく
「この」が減り「あの」増えてゆく年月に「その」はいよいよ辛みを加ふ
骨殖やす半年おきの注射受けさびしき午後につつまれてをり
誰もここに居なかつたやう 急死せしひとの住まひの扉閉きされて
「福山の城が焼けよーる」退避せる墓地に聞きけり大人らの声

「昭和で言えば」 小嶋一郎 佐賀

猫背ゆゑ枕を二つ重ね寝る老いの夜ことの為事しごとぞこれも
「平成」に「令和」継ぎ足しけふもまた「昭和で言えば」などと会話す
この村に三角屋根の建物は相応ふさはずなれどコンビニ二流行はや
守旧派と目され歌を詠み続け七十年目ぞ八十九歳

わが県の県庁所在地佐賀市には老いて用なし三年訪はず

刺客 原賀環子 東京

師走なりいそがしければ出来るだけしづかに歩くしづかに動く
ゼムピンからクリップになり今は箱 中村哲氏の記事の切りぬき
扉との外に空白ありぬピンポンの音のみのして人影を見ず
学童が学校にゐる午前九時ピンポン・ダッシュユする人はだれ
刺客をうしろから追ふ刺客あり 月夜なら勝つ星ならば持ち

冷えた廊下 小田部雅子 静岡

さびしさのしづかに下りてくる秋の冷えた廊下に匂へり林檎
富士山の初冠雪のひかる朝ひよろんと伸びるニンニクの葉は
寒風も悪意も芯にとどかぬやう分厚くやはくわが脂肪増ゆ
おれよりさきに死ぬなと願ふ人のためあしたゆふべのスクワット20
ドラマティックな歌のよろしさ日常のごく平凡な歌のよろしさ



桑原正紀 東京

労働を離れて十年、労働が与へてくれるよき眠り恋ほし
眠剤に頼りて五年、このごろはその眠剤に愛想つかさる
寝そびれてまた立ち上げるパソコンの機嫌が悪い寝起きのやうに
堀の上に赤いちひさな靴かたはう置かれるて冬の路地は暮れづく
路地の角まがりし刹那没りつ陽の直射浴びたり辻斬りのこと

狩野一男 東京

高野公彦 千葉

パソコンを2時間打ちし眼の疲れ速き雪富士見つつ癒やせり
砂糖になる前の粗糖のやうな歌若き人らに在り我に在り
我よりも老いたる巨き公孫樹その幹に触れ精氣いたたく
死は謂はばパンドラの箱 閉ぢしままそつと中身を思ひて生きむ
巨いなる釈迦横たはる筑紫の国恋ひつつ寒の夕焼け見をり

宮里信輝 神奈川

森重香代子 山口

海風に日がな揺れぬし庭くまの黄菊に夕べ陽が当たりをり
目高飼ひしことある甕が軒下に捨て置かれるてながき時経つ
すずめごも揚羽も訪はぬ冬の庭なにか不運の迫れるやうな
発作性心房細動とかで救急車にわれは運ばれゆきぬ
思ひがけぬうらやすけさよ救急車に身はほの温く揺られながらに

小島ゆかり 東京

影山一男 千葉

うぶすなの地名の由来辿りゐるグーグル先生わが暇つぶし
霞山稲荷が由来の霞町たぶん祖父、父知らずありけむ
四十年住みし猫実波が根を越すなと折り付けられし名ぞ
江戸湾になりはひたてし人生きし地ゆゑ津波を恐れし名付けし
土地土地に人ら生ききてなほ生きて還らむ海のひかり永遠なる

法学部法律学科OBであることつひに思ひ出したたり
卒業後四十八年過ぎにけり『白門人国記』をし読みゆく
苦しみや悲しみ多き人の世ぞ愛は情性で交はすべからず
加害者と被害者だけしかゐない世になりゆくごとしアフターコロナ
しろたへに山茶花咲いて十二月わが決断をうながす白さ
森林づくりボランティアの活動日今日は「七沢森林公園」
背丈越す雑草たちがしげるなり公園作業員の手薄なところ
ボランティアの今日の出席者は10名なり充電式刈払機がわれわれの武器
充電式刈払機の回転刃ブンブン回し雑草殲滅
雑草ら殲滅したれど地中の根しばらくすれば元のくさはら
とつぷりと秋ふかまれば皿よりも小鉢で食べるごはんのおかず
鳩どりは数へて数へられぬ鳥けふとほくまで水がひかるよ
またたくまSNSに増ゆる影「ショートショート」のS氏N氏の
四人居屋窓側ベッドに娘をり小鶯のやうな首をかたむけ
気胸ドレーナーの管につながれてなにゆゑここに娘はゐるか

木 畑 紀 子 京 都

木枯らしのなかを響けるサイレンはまた救急車「多死社会」といふ百さいの父をおくりて百さいの母を介護する友に文書く三日かけとどく便りにしたためる札の便りが着くは三日後ゆるゆると流るるアナログ時間こそ思ひ濃くなるにんげん時間卓上に十日ありたるひひらぎを捨てむとすればつよく香りぬ

島 田 暉 神奈川

歩むほどふくらむ夢よ欲望よ銀河の神より銀の手つつむ街路樹から苦悶の声がもれてくる年末午後の寒き北風コスモスの花ばな揺れる導火線胸に火を抱く人を誘へる夕空に富士山の峰燃ゆるなり吾に来いよと最後の光黒雲の荒れ狂ふまま吹きまくる追憶おそふ空爆地獄

大 松 達 知* 東 京

うますぎる酒を作ると飲む人が減つてゆくのので止めている説Woo Wooを注文してるこの人にその酒が出るまで調べない鍵がない、金はある、家に入れない、この広告に関心がない孕ませてしまったらしい男いてさきに飲み干すアイスソイラテくりかえし出る靴下の広告の柄がそのたび違う攻撃

田 宮 朋 子 新 潟

バス停のフェンスからむ野葡萄の紫水晶の実は雨雫せり末枯れたる藪のほほつき網透けて中の真紅の玉実かがやく吊るしおく八珍柿はちぢんがきの柿すだれかすかに揺れる秋の陽のなかつはれて里山しづか枯草の下をながるる水音ひびく金いろの公孫樹ひともと山すそに見つつ向かひぬ文芸祭へ

津 金 規 雄 神奈川

「舞踏会」の楽章ゆゑにわが愛すべリリオーズの作品14恋人の固有旋律イデリフイクスが見え隠れせり舞踏会のワルツの向かうにわたくしがタイムスリップして踊るひととき舞踏会の楽よ高まれ幻想は幻想ならずむせかへる脂肪のなかを踊るなれわれ汝我木管が奏でるワルツもどかしくまた悩ましく眼は追ふも

小 山 富 紀 子 京 都

一年に一度だけ出すお月見の陶の三宝母の手ひねり湯の宿の湯音聞きつつきのふより色深めたる庭のみぢ葉きのふより色濃きひと葉拾ひたり山の出で湯のもみぢの庭に「父の死後」「母の死後」との区切りあり弟とわれの記憶の中にこんなにも御所にどんぐり落ちてゐるはらべこ熊に送りやりたや

清 水 正 子 神奈川

音楽と猫が癒しといひし人だれか忘れしが然おもふわれも「ねこ座」なき星空散歩さびしけれ魔女狩りのころ消されしならむ骨壺に乗りて遊んでゐたらしい逝きし息子が猫を呼ぶのかバスケットに入れて連れこよ病床の彼と遊びし猫を抱きたい比呂美さんお手製のポストカードなり星空へ白き喪の鳩が飛ぶ

福 士 り か 青 森

病室で父がベッドを叩く音ばおーんばおーんと廊下にひびくさびしがりの猫に留守番させるなど見舞ひに行けば父が気遣ふ帰宅して人間として死にたいと父は訴ふ五分に一度彼岸では「婦唱夫随」と父は言ふ母逝きてより二十五年過ぐ母は朝、父はゆふべに逝きたまふ薄明かりするしろき病室

藤野 早苗 福岡

ありがたう、大丈夫よとふいに言ひその二日後に母は逝きたり
（その時がいつか知らねどその時に向かつて準備してゐる人体
うぶすなを九十一で離れたる母なり九十二歳で逝けり
十九年向かうの岸で待つてゐた愛する父に会へたか母よ
二重虹いくたびも見しこのながき秋の終りのみ空は伽藍

風間 博夫 千葉

一杯目、二杯目、三杯目と酌んで杯、杯、杯の差異を味はふ
一匹目、二匹目、三匹目と声の匹、匹、匹の変化たのしむ
促音のあとにつづけて読むときは破裂音化する一本のごと
撥音のあとにつづけて読むときは濁音化する二本のごと
一歩二歩三歩と読んで三歩にはならず一歩にもどりてゆけり

小島ゆかり著書二冊

はるかなる虹

第十六歌集
コスモス叢書第1236篇

短歌研究社

令和6年7月刊 三〇〇〇円(税別)

送料三〇〇円

サイレントニヤー

猫たちの歌物語
コスモス叢書第1241篇

短歌研究社

令和6年8月刊 一八〇〇円(税別)

送料三〇〇円

連絡先 〒112-0013 東京都文京区音羽一―一七―一四

音羽YKビル 短歌研究社

奥村晃作歌集 令和5年12月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

蜘蛛の歌 コスモス叢書第1232篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう コスモス叢書第1233篇 六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三―二四―一〇

マリノホームズ1A 六花書林

高野公彦評論集 令和6年3月刊 二八〇〇円(税別)送料三〇〇円

歌の魅力の源泉を汲む コスモス叢書第1235篇 柘書房

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼一―二―一五〇六

斉藤梢歌集 令和6年7月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青葉の闇へ コスモス叢書第1237篇 柘書房

著者住所 〒982-0831 宮城県仙台市太白区八木山香澄町

二―一〇―一三〇六 薄葉様方

田中愛子 埼玉

文字数を厳守し書いたわたくしの(一首鑑賞)だけがみじかい
正ちゃん帽はたべー帽おでかけに帽子えらぶも冬のたのしみ
わすれもの取りに家まで走りつつ髪がどんだん白くなりゆく
師にわたす三千円にて新旧のお札がまじりうるはしからず
歌うまき友にもらひしゴーフルを推敲の間にひとつ食べたり

橘 芳 園 新潟

一度来て今日は何度目土門拳写真美術館はわれのハライソ
酒田市は書棚の隅に忘れぬし『三太郎の日記』を思ひ出す町
酒田市は母によくしてくれし義兄が米屋の次男に生まれたる町
酒田市は子と同年の姉の子が一人で墓にねむりある町
酒田市は高一学期詩を教へ高瀬先生が帰られし町

水上 比呂美 東京

霜月の雑木林をちろちろと縫ふやうに飛ぶむらさきしじみ
武蔵野の森公園の大公孫樹よみ黄泉の戸口のごとき金いろ
五番目にせむといふ声聞こえきていちにい、さん、し五番目はわれ
霧の中はた水の中われを呼ぶ野太き声のくぐもりてをり
捨ててきた方の世界に棲むわれに会へる気がする夜雨の街で

鈴木 竹志 愛知

向かひ家の木瓜は寒木瓜花二輪咲かせて待てり雪降り来るを
我が家にも木瓜はあれども寒木瓜にあらざるゆゑか蕾もあらず
「朱雲集 開けば木瓜の歌ありて加藤淑子を癒しし花か
感染の懼れありたる手術終へし後の歌には木瓜の朱の花
困難な術前術後の歌のち木瓜の詠まるるはしばしの安寧

水上 英季 神奈川

ジャイアンのがび太をいぢめなくなつて久しいアニメ 乾燥の部屋
本棚の四十五巻の背表紙にドラえもん顔四十五ならぶ
電車から川の水量そらの色見つつ出勤しをり毎朝
歴史画のごとく幼児を取り囲み大人は派手に写真へ映る
作り笑顔覚えた子ども丁寧におむすび食べてきれいにポーズす

大野 英子 福岡

将来はと言ふことすでになくなりていつしか老後と言ふばかりなる
日没を知らせてさわぐ鴉たち曇つて日没見えないけふも
湧き止まぬ雲かき分けて覗きたい水平線にしづむ夕陽を
たつぷりと暮れた港に帰りに乗つた夏は遠くて
クリスマス仕様の灯りが点りある博多タワーは点りてさびし

松尾 祥子 東京

はつあきの軽井沢へ来つ退職後四十年経て同期の友と
右群馬、左長野に足を置く確氷峠に登り来たりて
ジョン・レノンが撮りたるポーズ真似て立つ見晴台の県境の石に
一周で一年寿命延びるとぞ樹齢千年超えるしなの木
県境の確氷山荘の力餅 胡麻、黄粉、小豆、辛み、胡桃餡

鈴木 千登世 山口

山積みの歌集に黄金きんの冬陽差しまだ読みをらぬ言の葉温む
知らぬ間に増えて書齋の床に散る歌誌歌書文庫百万の文字
かやくご飯仕込みし手もて抜き取れば牛蒡匂へる「家守綺譚」
紙ひもで十文字に本括りたり息をころして表紙をなでて
六冊でよんじふごゑん 古書店で差し出されたる硬貨の重み

小島 な お* 東京

齊藤 梢 宮城

レントゲンに肺は広がる、銀杏散る、御守りのように風を握りぬ
ドレーンのいまだ繋がる感覚に呼吸をすれば膨らむ鳥居
脇腹のほそい縫い跡身体にも横顔のあることを知りたり
触られるのがこわい破れて散らばった身体が紅葉して君に降る
飛行機に乗れない冬が過ぎてゆく床に積み重なる本の塔

伊集院静の逝きてもう一年 この夜は受け月すこし揺れてる
かぎりなく胸に湧きくるかなしみに読点を打つ句点ではなく
瞑りつつ春を思ひて言つてみる「たんぼぼ、ぼぼ」となるべく優しく
美しく寂しい秋は疾く去りて冬が来てゐる櫛にわれに
旧友のブログにて見る里の雪 瞳おのづと澄みてゆくなり

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

貝の味 ―海の幸の豊かさ―

生きてゐる浅鯛を蒸して貝ひらくとき
に与ふる酒の一滴 ひとしじく 柏崎 駿二 まきよし

日本人はよく魚を食べる。おそらく何十種、何百種の魚を食べているだろう。魚だけでなく、エビやカニなどの甲殻類も好んで食べる。タコやイカなどの軟体動物も食べる。

そして貝も食べるし、ひじき・わかめ・昆布などの海藻も食用にしている。ナマコやウニなどの棘皮動物も珍重して食べる。私も、そういう日本人の一人である。

海から獲れるものを、これほど多種にわたって、かつ大量に食する民族はあまりいないのではなからうか。しかも、これらを生のままでも食べる。たぶん欧米の人々から見たら、ニッポンジンは気味悪い民族であらう。

しかし、そんなことは全く気にする必要なし。回りをぐるりと海で囲まれているから海産物は豊富で、しかもどれもうまいのだから、それを食べないという手はない。私たちは魚食い、貝食い、海藻食いの民族でいいのだ。ただ、乱獲には要注意であらうが。

右の一首は貝を食べる歌である。食用にする貝も、種類が多い。牡蠣・ほたて貝・ムール貝などは世界中で食べるようだが、日本人はこの他にも食べる。あさり・しじみ・はまぐり・あわび・さざえ・とこぶし・たいらぎ・赤貝・あおやぎ・ほつき貝・つぶ・にし・ながらみ・鳥貝など、あげればキリがない。

あさりの調理法の一つが、右の歌にある酒蒸しである。生きたあさを蒸すと、やがて口をあける。そこを見計らって酒を垂らす。そして香ばしい酒蒸しの出来上がり物をおいしく食べようとする、人間の知恵である。歌集『四月の鷺』より。

(『うたを味わう』より再録)